

## おわりに

「生徒が英語に触れる場면을充実」させるために、そして、「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」ために、「授業は英語で行う」と、新学習指導要領に明記されている。今後どのような授業が求められるのか、効果的な指導法はどのようなものなのか。多くの英語教師が、授業改善の必要性を感じていると思う。今回は、英語を用いての授業の展開方法について研究をした。

「事例1」では、生徒が授業中に英語に触れる機会を増やすにはどうしたらよいか、コミュニケーションの手段として英語を用いる必要がある場面をどのように設定するか、ということを考えて授業を実施した。事前アンケートで「書く」ことを苦手とする生徒が多かったため、コミュニケーション活動を意識した統合的指導も行った。内容を理解させるために、ペアワークやグループワークを効果的に取り入れたり、視覚教材を有効に活用したり、様々な工夫をした。生徒の現状を踏まえ、分かる授業を心がけながら、生徒のコミュニケーション能力を高めていくことができた事例である。

「事例2」では、英語でのインタラクションを増やすにはどのような方法があるのかを研究した。まずは、教師の英語の発話量を増やし、英語のインプットを十分にさせた。次に、生徒の自発的な発話を促しながら、教師と生徒のインタラクションを増やし、最終的にはディベートという形式で生徒同士がインタラクションを図りながら、英語をアウトプットできた事例である。生徒に自己表現活動をさせるために、段階的なタスク活動を取り入れた。段階的に指導することで、相手の考えを理解し、自分の中で整理し、それに対する自分の考えを伝えようとする姿勢を身に付けさせることができた。

「事例3」では、リーディングの授業の特性をかんがみ、英文を読み、自分の考えをまとめ、伝える活動を中心に行った。英問英答などを取り入れ、伝えることと理解すること、つまり英語でのやりとりを何度も体験させた。また、教科書の本文を読む前後に、聞いたり、話したり、書いたりする活動を取り入れて、生徒の英語に触れる機会を増やした。スライド資料を使用したり、ワークシートを工夫したりして、生徒の英語学習への意欲を高め、アウトプットにつなげた事例である。

「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に指導し、生徒に英語運用能力を身に付けさせるために授業はある。例えば、英語を読んだらそれについて何か書かせる、英語を書いたならそれを相手に伝えさせる、相手の意見を聞いたならそれに対する自分の意見を言わせる、というように一つの言語活動を何か別の活動に関連付けることで、有機的な関連を図った指導はできる。最初から生徒に、言語活動を全て英語で行うことを求めず、段階的な指導をしていけば、徐々に英語力はついてくる。生徒のコミュニケーションへの意欲を高めるためには、まず毎日「わかる授業」を心がけることが大切である。知識を与えることはもちろん大切であるが、それを活用させる場面がある授業が、生徒にとってよい授業であると考えられる。今年度、文部科学省から全高等学校に「新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料」が配布された。その中で、初等中等教育局太田光春視学官が授業に求められる10の要素を挙げている。その中に次のようなものがある。

英語を学ぶことや使うことの楽しさ、教師の情熱が伝わる、言い換えれば、教師が良い手本 (role model) やあこがれになった授業である。

学ぶ方法を教え、学ぶ意欲や自信を与える授業が求められている。授業の内容が生徒にとって魅力あるものであること、授業に興味・関心がもてる活動が取り入れられていること、が重要である。生徒に身に付けさせたい英語力は何かを常に考え、魅力あるコミュニケーション活動を実施する必要性を再認識している。

高等学校における教科指導の充実

外国語科 <英語>

「授業を英語で行う」ための工夫

発行 平成23年3月

栃木県総合教育センター 研究調査部

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070

TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>